社会科（歴史的分野）学習指導案

１　単元名

「第２章 古代までの日本　２節 日本列島の誕生と大陸との交流」

２　単元について

（１） 単元観

【学習指導要領上の位置づけとねらい】

本単元の「第２章 古代までの日本　２説 日本列島の誕生と大陸との交流」は「中学校学習指導要領 第２章 第２節 社会」において、「歴史的分野 ２内容 B近世までの日本とアジア」の中に位置付けられている。本単元では、日本列島における農耕の広まりと生活の変化や当時の人々の信仰、大和朝廷（大和政権）による統一の様子と東アジアとの関わりなどを基に、東アジアの文明の影響を受けながら我が国で国家が形成されていったことを理解させることをねらいとする。また、農耕の広まりや生産技術の発展、東アジアとの接触や交流と政治や文化の変化などに着目して、事象を相互に関連付けるなどするとともに、縄文・弥生・古墳の三時代を大観し、時代の特色を多面的・多角的に考察し、表現することも併せてねらいとする。

【縄文時代の社会と人々の生活】

日本列島が誕生したとされる今からおよそ１万年あまり前に、地球の気候は温暖になり、植生も変化するとともに、大型動物は絶滅して動きの速いニホンシカやイノシシなどが多くなった。こうした環境の変化に対応する形で人々の生活は大きく変化し、縄文文化が成立する。縄文文化の特色は、増加する中小動物を射止める弓矢、食物を煮るための土器、さらに磨製石器の出現などである。この時代に用いられた土器は縄目の文様をもつものが多いことから縄文土器と呼ばれ、低温で焼かれた厚手で黒褐色のものが多い。縄文土器が使われていた時代を縄文時代といい、その形状の変化から草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の６期に区分される。

人々の生活は縄文時代に入ってもなお狩猟・採集が中心であったが、海面上昇によって島国となったことにより漁労の発達が進んだことは、今も各地に数多く残る縄文時代の貝塚からわかる。釣り針などの骨角器や丸木舟などが各地で発見されていることもこれを補完する。食料の獲得方法が多様化したことにより、人々の生活は安定し定住的な生活が始まった。地面を掘ってその上に屋根をかけたたて穴住居に住み、飲料水の確保に便利な水辺に近い台地に集落（むら）が営まれた。青森県の三内丸山遺跡などからもわかる通り、縄文時代の社会を構成する基本的な単位はたて穴住居４～６軒程度の世帯からなる 20～30 人ほどの集団であったとされる。集団同士、とりわけ遠方との交流が盛んに行われていたことは黒曜石やひすいなどの分布状況からもわかる。集団に統率者はいても身分の上下関係や貧富の差はなかったと考えられる。縄文人はあらゆる自然物や自然現象に霊威が存在すると考えるアニミズム思想のもとで、呪術によって災いを避けようとし、また豊かな収穫を祈ったとされる。女性をかたどった人形である土偶や成人の通過儀礼とされていた抜歯、屈葬による死者の埋葬などはその表出と考えられる。

【弥生時代における水稲農耕（稲作）の伝来による社会の変化】

日本列島で縄文時代が続いていたあいだに、ユーラシア大陸・中国では紀元前 6500～5500 年ごろ、黄河中流域で農耕がおこり、長江下流域でも稲作が始まり、農耕社会が成立した。こうした大

陸における農耕文化の発達は、周辺地域に大きな影響を及ぼし、朝鮮半島を経て日本列島に伝来した。

およそ2500年前と推定される縄文時代の晩期、朝鮮半島に近い九州北部で水田による米作りが開始された。佐賀県の菜畑形跡や福岡県の板付遺跡などの九州各地で縄文時代晩期の水田が発見されており、この時期から我が国で水稲農耕（稲作）が開始されていたことがわかっている。この時期はいまだ縄文土器を使用していたことから縄文時代に分類されるが、弥生時代の早期ととらえようとする意見もある。こうして、紀元前４世紀ごろには西日本に水稲農耕（稲作）を基礎とする弥生文化が成立した。やがて北海道と南西諸島を除く日本列島の大部分で水稲農耕（稲作）が始まり、人々の生活は狩猟・採集を主とする獲得経済から農耕による生産経済へと移行した。この紀元前４世紀ごろから紀元後３世紀までの時期を弥生時代という。

弥生文化の特色は、稲作を基礎とする生産経済の広まりとそれに伴う金属器の使用、弥生土器の出現などである。稲作の本格的な開始により、人々の生活は大きく変化し豊かになった。耕作用の鋤や鍬、収穫時に用いる石包丁などの農具が出現し、収穫された稲を貯蔵する高床倉庫が集落内に作られた。住居は縄文時代と同じくたて穴住居が一般的だったが、集落を構成する住居の数は多くなり、大規模な集落が各地に現れた。死者は集落内の共同墓地に伸展葬にて葬られたが、大規模な墳丘をもつ墓が各地に出現した。また、弥生時代中期に見られる甕棺墓の中には、多量の鏡や青銅製の武器などを副葬したものが認められる。こうした、大規模な墳丘をもつ墓や多量の副葬品をもつ墓の出現は、集団の中に身分の差が現れ、強力な指導者が各地に出現したことを示している。

縄文時代からの変化として著しい点は、集落の中には佐賀県の吉野ケ里遺跡に見られるような、まわりに深い濠などをめぐらせた環濠集落や香川県の紫雲出山遺跡のような、山上に位置する高地性集落が出現した点である。こうした防御施設を備えた集落の出現は、農耕社会の発展にともなって蓄積された余剰食糧をめぐる戦いが始まったことに起因する。強力な集落は周辺の集落を、争いを経て統合し、各地に「クニ」とよばれる政治的な集団が分立していった。この時期の日本列島における小国の分立は「漢書地理志」「後漢書東夷伝」等の中国の歴史書にも記載がある。これらの歴史書には「倭人」が中国へ使者を送り関係を築こうとしていたことや、奴国（現福岡市付近）の王が中国・後漢の光武帝から印綬（金印）を授かったことなどが記されている。また、「魏志倭人伝」によると、邪馬台国の女王・卑弥呼によって、争乱で乱れた「倭国」が平定され、邪馬台国を中心とする29ばかりの小国の連合が生まれたとされる。卑弥呼は中国・魏に使いを送り、「親魏倭王」の称号と金印、多数の銅鏡を得たとされ、呪術的権威を背景に政治を行っていた。

以上のことから、縄文時代から弥生時代にかけて、稲作の開始と争いの発生が人々の生活を大きく変化させ、日本列島に強大な指導者をもつ小国が次々と生まれた。小国の指導者らは中国や朝鮮半島の先進的な文物を手に入れ、「倭国」における他の小国よりも優位な立場を得ようと積極的に大陸との交流を行って朝貢関係を結んでいたことがうかがえる。

【古墳の出現と大和政権の成立】

弥生時代の後期には、各地にすでに大きな墳丘をもつ墓が営まれていたが、３世紀中ごろから後半になると、より大規模な前方後円墳をはじめとする古墳が西日本を中心に出現した。この３世紀中ごろから７世紀ごろまでを古墳時代という。これらの古墳はいずれも各地の有力な指導者たちが作らせたものであり、古墳の墳丘には埴輪が並べられた。前期の古墳には多数の銅鏡や鉄製の武器が副葬され、この時期の被葬者が司祭者的な性格を有していたことをうかがわせる。一方で中期以降は武器や馬具の割合が高まり、被葬者の武人的性格が強まったと言えよう。

古墳の出現期において、規模の大きなものは奈良県（大和）にみられ、古墳が有力者によって作られていたことをふまえると、この時期大和地方を中心とする近畿中央部の勢力によって政治連合

が形成されていたと認められる。この政治連合を大和政権といい、古墳の分布から４世紀中ごろまでにその支配権を東北地方中部まで広げたことがわかる。大和政権の指導者は大王と呼ばれ、埼玉県の稲荷山古墳から出土した鉄剣や熊本県の江田船山古墳から出土した鉄刀にその文字が刻まれている。最大の規模を持つ古墳は。大阪府の大仙古墳（仁徳陵古墳）で、５世紀の大和政権における大王の墓と考えられる。

我が国に古墳が出現し始めたころ、朝鮮半島では中国東北部から高句麗がおこり、のちに百済、新羅、伽耶地域（任那）が成立した。倭国（大和政権）は朝鮮半島南部の鉄資源確保のため、早くから伽耶地域と密接な関係を築いており、４世紀後半に南下してきた高句麗に対して百済・伽耶地域とともに戦ったことが高句麗の好太王碑の碑文に記されている。その後、５世紀に入ると「倭の五王」と呼ばれる大和政権の大王５人が朝鮮半島南部をめぐる外交・軍事上の立場を有利にするため、あいついで中国へ朝貢している。このことは中国の歴史書「宋書倭国伝」に記されている。また、この間に倭国（大和政権）は百済や伽耶地域からさまざまな技術や文化を学び、進んだ鉄器・須恵器の生産や機織りなどの諸技術や、漢字、儒教、仏教などの諸文化が渡来人らによって我が国にもたらされた。

６世紀末から７世紀初めになると、各地の有力な指導者たちが営んでいた前方後円墳の造営は止まる。これは大和政権の強力な規制に基づくものと推測される。この時期の東アジアは中国・隋が国内統一を果たし朝鮮半島への進出を見せていた。こうした国際情勢に鑑み、倭国（大和政権）も大王（天皇）を中心とする中央集権国家を目指すようになり、かつての首長連合体制やその象徴である前方後円墳の造営の停止に踏み切ったものと思われる。考古学上はこの時期を古墳時代の終末期としているが、政治史上では古墳の造営が止まる６世紀末ごろからを飛鳥時代としている。

【縄文・弥生・古墳の三時代の整理と大観】

縄文時代は世界史的見地からみるに、我が国の新石器時代にあたる。それは、人々の生活は狩猟と採集を中心とした獲得経済に基づいて営まれつつも、集落を形成し旧石器時代のような移動生活からは一線を画している点に認められる。

そうした中に東アジアでおこった農耕文化が朝鮮半島を通じて、伝来する。ここから人々の生活は獲得経済から生産経済へと徐々に移行し、それに伴って人々は豊かになっていった。九州から西日本に至る広範囲に水稲農耕（稲作）が伝播し、弥生時代へと入ると、金属器の伝来や弥生土器の出現等により、人々の暮らしはさらに豊かになるとともに、集団的な農耕作業は強力な指導者を生み出した。やがて集落間に収穫能力の差から貧富の差が生まれ、余剰生産物を求めた争いが発生するようになる。これに応じて集落の構造も変化し、力のある集落が他の集落を統合して小国を形成するようになる。やがて、倭国内の小国の王らは大陸の先進的な文物や自らの地位の優位性を得るため、中国へ使いを送り朝貢関係を結んでいった。

こうした中、国内に有力者の墓である大規模な古墳が出現する。一方で各地の有力者らをまとめ上げる大和政権が成立し、東アジアとの交流を深めながら大陸文化の受容を進めた。大和政権は東アジア情勢に影響を受け、それまでの首長連合体制から大王（天皇）を中心とする中央集権国家の形成へと舵を切り、それはのちに中国の隋・唐から影響を受けた、律令国家の建設へと接続する。

以上の点をふまえた上で、生徒たちに最終的につかませたい三時代の特色は、①農耕の開始と発展による社会集団の変化（「むら」から「クニ」へ）、②小国の発生とその連合としての大和政権の成立（「クニ」から「国」へ）、の２点であり、社会集団の規模の変化に注目しつつ、我が国が東アジアと密接に関係を持ちながら国家形成へと向かっていく過程をつかませたい。また、次の単元への接続をふまえ、律令国家建設への胎動が始まっていることにも気づかせたい。

（２） 本校の社会科研究主題との関連

本校社会科の研究主題「社会に対する関心を高め、多角的・多面的な視点から考察する能力を身に付けさせる社会科指導の在り方　～ICT を活用した基礎・基本の定着と主体的・対話的で深い学びを取り入れた学習を通して～ 」を踏まえ、単元における基礎的な概念や意義等の理解と定着を図り、その過程において、主体的に考え判断し、表現する場面を設定することで、その力を高めることをねらいとする。本授業においては、授業のまとめとして、ギガタブ上の振り返りフォームを使用し、学習内容の確認を行い、定着へとつなげるねらいがある。

３　単元の目標

（１） 農耕の広まりや生産技術の発展、東アジアとの接触や交流などに着目し、我が国における社会や時代の変化について理解できるようにする。

（知識及び技能）

（２） 日本列島における社会の変化と東アジアとの関わりを通じて、我が国で国家が形成されていった過程を対話的な活動を通じ、多面的・多角的に考察、構想し、表現できるようにする。

（思考力、判断力、表現力等）

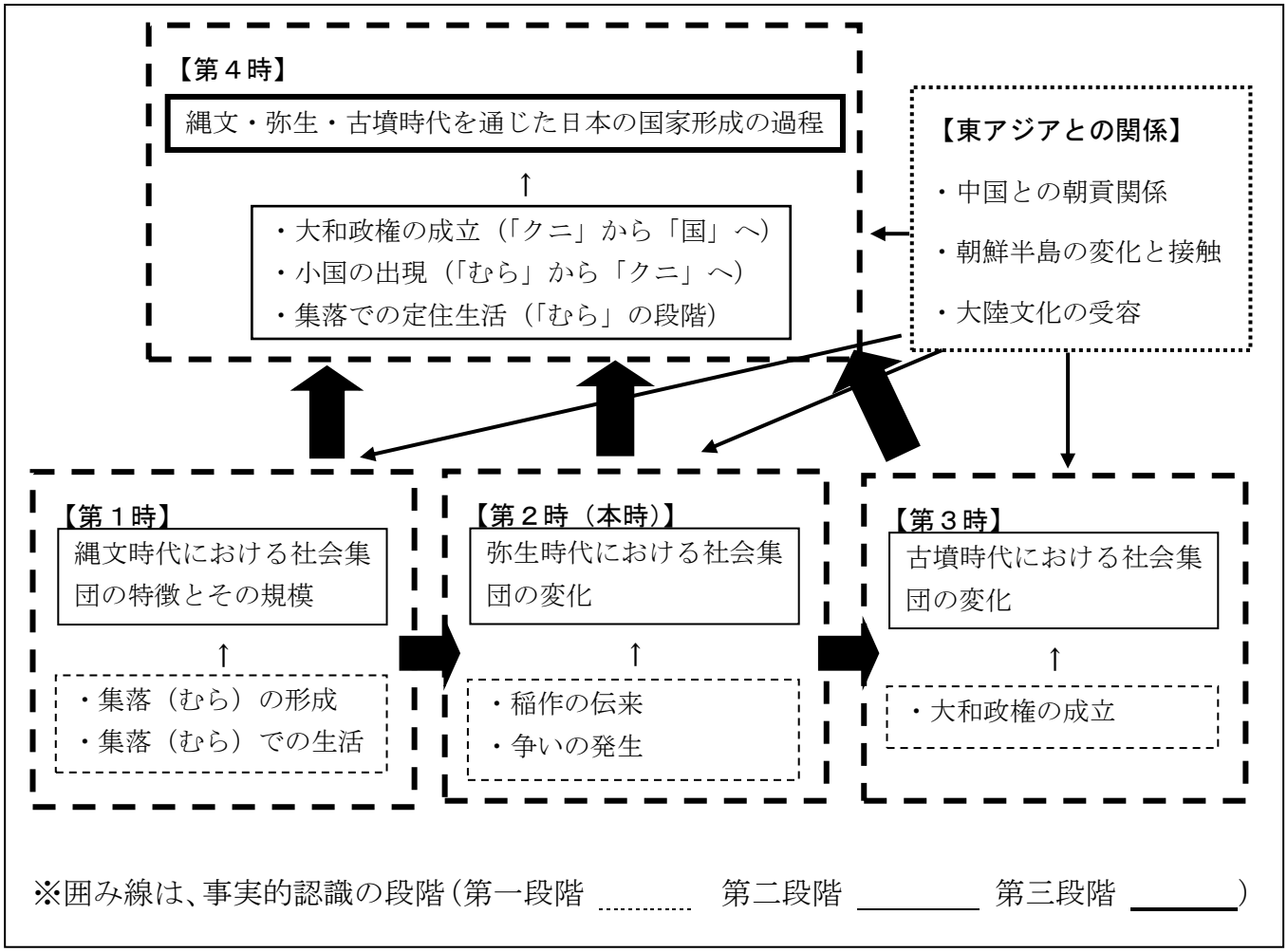
（３） 我が国に国家が形成される過程で生じた諸事象から社会や時代の変化を考察し、その要因等について主体的に考えることができるようにする。（学びに向かう力、人間性等）

４　単元の学習計画（４時間扱い）

時	主な学習内容	評価
1	○旧石器時代と縄文時代の暮らし ・日本列島の誕生（獲得経済から生産経済への以降期） ・縄文文化の成立（縄文土器、貝塚、たて穴住居に見られるむらの形成） ●単元を貫く問いの設定 **社会の変化に注目し、日本にどのように国家が作られていったのかをつかもう**	◇さまざまな遺物や遺跡の発掘など、考古学の成果を主体的に考察している。 （主体的に学習に取り組む態度） ◇日本列島で狩猟・採集の生活を行っていた人々の生活の特色について理解している。 （知識・技能）
2 本時	○弥生時代の暮らしと邪馬台国 ・弥生文化の成立（稲作の開始、金属器の伝来、弥生土器の登場等） ・小国の発生（奴国、邪馬台国等） ・東アジアとの関係（大陸文化の受容と朝貢関係）	◇縄文時代と弥生時代のむらの比較から、社会の変化を主体的に考察し、表現している。 （主体的に学習に取り組む態度） ◇社会の変化の考察を通して、弥生時代における我が国の国家形成の過程を理解できるようにする。（知識・技能）
3	○大王の時代 ・大和政権の発展（大王の出現） ・古墳文化（古墳の出現とその特徴） ・大陸（朝鮮半島・中国）との交流（朝貢関係の継続と渡来人）	◇大和政権の国内統一の過程を、古墳の分布や鉄剣などの資料を通して主体的につかもうとしている。　（主体的に学習に取り組む態度） ◇遺物や遺跡などの具体的な資料を通して、古墳文化の特色を理解している。 （知識・技能）
4	○縄文、弥生、古墳の三時代における国家形成の過程 ・三つの時代の大観	◇三つの時代における、社会や人々の生活の変化に着目し、我が国における国家形成の過程についてまとめている。

	（農耕の発展と広がりによる小国の形成と大和政権の成立）	（思考・判断・表現）

５　思考の深化に対応した単元の指導計画



６　思考の構造図

【事実的認識の第三段階】

農耕の発展による社会集団の変化により小国が発生し、その連合としての大和政権が成立した。

【事実的認識の第一・第二段階】

A 小国をまとめる大和政権が成立した。（「クニ」から「国」へ）

a 前方後円墳が各地に出現し、古墳文化が成立した。
b 近畿地方を中心とする大和政権が成立し、九州から東北南部までを支配した。
c 朝鮮半島に高句麗・新羅・百済・伽耶地域などがおこり、大和政権と接触した。
d 大和政権の大王ら（＝倭の五王）は朝鮮半島の支配権を求めて中国に相次いで朝貢した。
e 渡来人が進んだ技術や文化を伝えた。

B 各地に小国が出現した。（「むら」から「クニ」へ）

a 大陸から水稲農耕（稲作）が伝来し、獲得経済から生産経済への移行が始まった。
b 金属器や弥生土器が出現し、弥生文化が成立した。
c 稲作の発展が余剰生産物を求める争いを生み、その結果として各地に小国が発生した。
送り朝貢を行った。

C 集落での定住生活が営まれていた。（「むら」の段階）

a 地球の気温が上昇し、海面上昇の結果として日本列島が誕生した。
b 縄文土器、貝塚などが出現し、縄文文化が成立した。
c 人々はたて穴住居に住み、狩猟・採集を中心としつつも集落（むら）を形成して定住生活をしていた。
d 集落（むら）では土偶などアニミズムに基づく呪術的な儀式や風習が行われていた。

7　本時の指導

（1）　本時の目標

①縄文時代と弥生時代のむらの比較から、社会の変化を主体的に考察し、表現できるようにする。
（学びに向かう力、人間性等）

②社会の変化の考察を通して、弥生時代における我が国の国家形成の過程を理解できるようにする。
（知識及び技能）

（2）　本時の展開

時間	学習内容と活動	指導上の留意点及び支援の工夫（○） 評価項目（◎）
導入 15 分	○縄文時代と弥生時代のむらの比較 ・稲作の開始、建物や施設の変化（柵、堀、やぐら）、指導者の登場等を確認 **学習課題　「弥生時代に日本の社会はどのように変化したのだろうか。」**	○ギガタブのジャムボードを使用して、班ごとに気づいたことを打ち込ませる。 ◎縄文時代と弥生時代のむらの比較から、社会の変化を主体的に考察し、表現しようとしている。（主体的に学習に取り組む態度）
展開 25 分	○縄文時代からの変化をまとめる。 ・稲作の開始　→　争いの発生 ・青銅器・鉄器の伝来 ・弥生土器の登場 ○小国の発生 【発問】争いの中で日本社会はどうなっていっただろうか。 【資料提示】「漢書地理志」「後漢書東夷伝」「魏志倭人伝」 ・小グループでの話し合い ・日本に小国が発生していたことや中国との朝貢関係を読み取る。	○概要を板書に整理する。 ○教科書の資料を提示 ・「倭」≒日本、「朝貢」の意味を確認 ○概要を板書に整理する。
まとめ 10 分	○弥生時代の社会の変化について振り返る ・ギガタブ上の振り返りフォームを利用して、学習した基礎的な語句について確認、弥生時代における社会の変化を自分の言葉で記述し、提出する。 稲作が始まり、争いがおこる中で、小国が発生した。小国のリーダーたちは中国と朝貢関係を結んだ。	◎社会の変化の考察を通して、弥生時代における我が国の国家形成の過程を理解できるようにする。 （知識・技能）